

大阪大学原子力規制人材育成事業

公開シンポジウム 挨拶

皆様、こんにちは。原子力規制委員会委員長の山中伸介です。

本日、ここ大熊町（おおくままち）にある「大阪大学大熊拠点」において、大阪大学が主導する原子力規制人材育成プログラムのキックオフシンポジウムが、地元大熊町（おおくままち）の皆様、福島高専の教職員・学生の皆さん、そして関係各位のご尽力のもと、このように開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

大熊町（おおくままち）と大阪大学は連携協定を結び、この大熊拠点を設置してまいりました。これまでの活動を通じて様々な模索や課題もあったことと存じますが、そうした地域の皆様との関係性の土台の上に、今回は新たに工学研究科が主体となり、現場の実情に即した実践的な取り組みへと大きく踏み出すこととなります。本シンポジウムに先立ち、昨日、一昨日の2日間にわたって学生や地域の皆様が一堂に会し、「フューチャーデザイン・ワークショップ」が行われたと伺っております。大

熊の地に身を置き、時間をかけて未来の姿を真剣に語り合われた皆様の熱意に、深く敬意を表します。

原子力規制委員会は発足以来、東京電力福島第一原子力発電所事故の深い反省と教訓を原点としてまいりました。事故現場の廃炉を安全かつ着実に進めるための厳格な監視と指導は、私どもの最も重い責務です。しかし、廃炉や環境回復、そして地域の復興という営みは、単に机上の工学的基準や数値を現場に当てはめるだけで完結するものではありません。

私たちが向き合っているこの課題は、数十年、あるいはそれ以上の歳月を要する極めて息の長い取り組みです。こうした気の遠くなるような時間を前にしたとき、私たち人間は誰しも、短期的な判断の枠組みに意識が引っ張られる「現在バイアス」という心理的な壁に直面します。

もちろん、今あるリスクを最小化し、現場の着実な一步を積み重ねることは不可欠です。それに加えて、将来世代の視点に立って物事を俯瞰してこそ、持続可能な技術開発を進め、次世代の若者たちが誇りを持って戻り、暮らせる豊かな地域の未

来を切り拓くことができます。

哲学者・梅原猛先生は、かつて近代文明と科学技術のあり方を深く洞察される中で、「科学技術がもたらす光だけでなく、その技術が内包する『罪』や限界にどれだけ自覚的であるか」を厳しく問われました。科学技術を扱う者、そしてそれを規制する者は、自らの技術が社会や自然環境、そして人々の営みにどのような深い爪痕を残しうるのか、その根源的な問いから決して目を背けてはなりません。

また、大阪大学の元総長であられた哲学者・鷺田清一先生は、かつて「声なき声への想像力」や「臨床の知」という言葉で、制度や効率性の枠組みからこぼれ落ちてしまう人々の沈黙、現場の痛みじつと耳を傾けることの大切さを説かれました。

今、この大熊拠点で、そして日本社会全体において求められているのは、まさにこの姿勢です。福島復興や廃炉、環境の回復は、決して福島という地域やそこに暮らす方々だけの課題ではありません。原子力という巨大な科学技術の恩恵を等しく享受してきた私たち国民一人ひとりが、自らの問題として真正

面から引き受けなければならない、国全体の責任です。現場に立ち、言葉にならない地域の切なる願いや歴史の重みを受け止めること。そして同時に、まだ見ぬ将来世代という、今ここには存在せず、自ら声を上げることのできない「沈黙の他者」の声に、日本社会全体としてどれだけ豊かな想像力を働かせることができるかという問いでもあります。

この2日間で行われた第1回の「フューチャーデザイン・ワークショップ」は、まさにその沈黙の声に耳を澄まし、現在バイアスを低減させるための優れた知恵です。「50年後、100年後の世代から見て、今の私たちの歩みはどう映るのか」。将来世代の視座に身を置き、未来から今あるべき姿を問い直す。ワークショップの回数を重ねるごとに思考が深まり、私たちの視野を大きく広げてくれるものと確信しております。

そして何より重要なのは、その気づきを単なる議論で終わらせず、私たち自身の具体的な「行動変容」へと結びつけることです。

未来の世代に胸を張って引き継げる復興とはどのようなもの

か。その共通の問いを抱き、多様な主体が立場を超えて建設的に手を取り合うこと。そして、将来を見据えた確かな知見をもとに、一人ひとりが日々の役割の中で新たな一歩を踏み出すこと。それこそが、私たちが目指すべき道であります。

大阪大学は市民社会の支援で誕生した原点を持ち、「社会の中にある大学、社会のための大学」として共創を掲げてきました。原子力規制委員会がこの事業を採択したのも、単なる技術教育にとどまらず、社会との誠実な対話を通じて課題解決に挑む姿勢を高く評価したからです。これは大学にとっても困難な挑戦ですが、極めて意義深い試みです。

しかし、率直に申し上げて、この「学び」と「共創」は、学生たちだけのものではありません。大学の教員自身が、象牙の塔から現場へ降り立ち、地域の方々が積み重ねてこられた苦難の歴史や切実な願い、そして廃炉や復興の最前線で泥をかぶって格闘してきた専門家たちの覚悟に、どれだけ謙虚に向き合えるかが問われています。現場感覚や社会への想像力を欠いた独善的な知識は、かえって人々を傷つけ、信頼を損ねてしまいます。「社会のための大学」を標榜するのであればなおのこ

と、学生を指導する教員自身こそが自らの未熟さを自覚し、学生と共に、そして地域の方々から真摯に学び直す姿勢を持たなければ、このプログラムに未来はありません。

福島の皆様に真の意味で貢献できるようになるまでには、まだ長い時間がかかることと思います。時に迷い、躓(つまず)くこともあるかもしれませんが。それでも私は、大熊町(おおくままち)の皆様、福島の皆様に、この教員と学生たちの成長を、どうか温かく、時には厳しく見守っていただきたいと切にお願い申し上げます。彼らは必ずや皆様と対話を重ね、痛みに寄り添いながら、未来をともに切り拓く力になってくれるはずです。

最後に、学生の皆さん、そして何よりも教育の場に立つ教員各位に向けて、一つの言葉を贈ります。

かつて若き吉田松陰先生は、日本の危機と防備の実態を自らの目で確かめるため、会津や福島の地を歩き、現場で人と対話しながら思索を深めました。その現場主義を貫いた松陰先生の言葉として語り継がれているのが、次の教えです。

「夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし。故に、夢なき者に成功なし」

福島復興とこれからの原子力安全という途方もない挑戦に向き合うにあたり、学生の皆さんはもちろんのこと、教員自身が過去の狭い学問の殻を破り、大きく変貌を遂げていただきたい。まず将来への大きな「夢」を描くこと。その夢を現実の「理想」へと高め、緻密な「計画」を立て、自らの手で謙虚に「実行」に移し、確かな「成功」——すなわち福島の真の復興と安全の未来を掴み取るために、教員自らが誰よりも厳しく自らを変革し、範を示していただきたいと切に願っております。

大熊町（おおくままち）と大阪大学の連携のもと、本プログラムが真に地域に寄り添い、福島の未来に資するものへと成熟していくことを強く期待いたしますとともに、福島高専の関係者の皆様、そして温かく迎えてくださった大熊町（おおくままち）の皆様に心より感謝を申し上げます。本日のシンポジウムが、福島の確かな未来を切り拓く実り多い一日となりますことを祈念いたしまして、私の開会のご挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。